心療内科医のひとり言 2017年度

中野弘一 医師

病気になって得られるもの

五十五歳の男性が心療内科に来診した。三カ月前脳卒中の発作に見舞われ、左半身が不自由になった。リハビリテーションを勧められ、歩行の訓練をしていたが、不自由な左側の痛みが強く辛かった。神経内科の医師に痛みを訴え、鎮痛薬が処方されたが、効果は不十分だった。不眠も出現し、抗不安薬や睡眠導入薬が試みられたが、充分な効果が得られずに、心療内科に「紹介となった。紹介状には治療に抵抗している病態と考えられる」と書かれていた。ちょっと僕も緊張して面談を始めた。

彼は思うように手と足の機能が回復しないので、治療のスタッフにも不信感を感じ、治療に対する不満をぶつけるようになっていた。それまで夫唱婦随で生活をしてきた妻に対してもイライラを向けるようになっていた。これまでは彼は怒りとは無縁の穏やかな暮らしをしてきたようだ。

僕は彼が脳の中の出血という病気を異物と考え、自分の身体から外へ「出そう、出そう」としていると感じた。そこで彼に「病気を自分の一部にして、病気を嫌いにならずに好きになるように考えを変えては」と提案した。彼は「この医者、何言ってんの？」という表情をしたが、僕は話し続けた。

病気はいろいろなことを教えてくれる。自分の力でもまた医師の力でも元に戻せないものがある。さらにご家族など周囲の方々があなたを支援してくれていることを知ることもできた。この病気は嫌なことをあなたに授けたが、今まで気が付かなかった素敵なことを教えてくれていると思う―と伝えた。

彼の目から涙がこぼれた。診察を終えて待合室で奥様と笑顔で話していた。僕が病棟に向かう途中に、「また来月お待ちしています」と声をかけた。彼は立ち上がって「今日は診察を受けにきて本当によかった」と話してくれた。これから病気との二人三脚を始めることが出来そうな予感がした。

（三愛病院心療内科医師・東邦大学医学部教授）